英語のIt be NP V-ing構文による事態の同定*

大竹芳夫

1．はじめに

英語にはIt＋be動詞がその補部に名詞句＋-ing句の連鎖を従える構文がある（以下、用例中の下線表示は筆者による）。

(1) "Do you hear that?" "I do..." Gwen whispered. "It's the wind howling." "It's not the wind. Listen." Samantha swallowed.

(K, F. Williams, *As the Crow Flies*)

（「あの音が聞こえる？」「聞こえるわ…」グエンが小声で言った。「風がうなっているのよ。」「あれは風じゃないのよ。よく聞いて。」サマンサはつばを飲み込んだ。）

(1)では、"Do you hear that?"（あの音が聞こえる？）という質問の答えとして、"It is" がその補部に名詞句＋-ing 句の連鎖を従える構文 "It's the wind howling."（風がうなっているのよ）が発話されている。(1)の "It's the wind howling." は聴覚を介して直接知覚された「音」を同定する構文であり、その補部の名詞句＋-ing 句の連鎖は主述関係を表す小節（small clause）である。Declerck（1981）ではこの構文の-ing 句は疑似修飾節（pseudo-modifier）と呼ばれ、その意味特性の解明が試みられている。しかしながら、Declerck（1981）の分析は、(1)のような知覚された先行する事柄を同定する用例の分析に留まり、It＋be動詞がその補部に名詞句＋-ing句の連鎖を従える構文の全体像を明らかにしてはいない。

本構文は話し手の心的態度を表す法助動詞としばしば共起する点にも特徴がある。次の例では、法助動詞のmight（=(2a)）、must（=(2b)）、could（=(2c)）を伴って本構文が発話されている。

(2) a. As I'm clattering through the cupboards looking for the new box of teabags the doorbell goes. […] It might just be Kevin coming around to check on me. Or the police, about last week. Or— (B. Halls, *The Quarry*)

（食器棚から新しいティーバッグの箱を探してガチャガチャ音を立てていると、玄関のベルが鳴った。[…] ケビンが私の様子を見に来ただけなのかもしれない。それとも先週のことで警察か。それとも…）

b. He wasn't sure but Liam thought he saw the trunks of the trees moving. It must just be him being tired. Trees don't move.

(L. Carrier, *From the Imaginarium of L. G. Carrier*)

（確信はなかったが、リアムは木の幹が動いているのを見たような気がした。彼が単に疲れていただけなのにちがいない。木は動かないのだ。）

c. ‘He looks happy enough to me. And I never asked him to keep coming here. It’s ridiculous.’ ‘Now, now, Wincey. Do you not think it could be you being ridiculous, dear? […]’ (M. T. Davis, The *Gourlay Girls*)
(「彼は私には十分幸せそうに見えます。それに、私は彼にここに来続けるように決して頼んではいませんでした。ばかげています。」「ねえ、ウィンシー。あなたがばかげているのかもしれないとは思わないの？[…]」)

本研究では、It＋be 動詞がその補部に名詞句＋-ing 句の連鎖を従える構文を It be NP V-ing 構文と便宜的に呼び、実際の言語資料を観察しながらその意味と機能を解明する。

２．知覚された事態の動作主と動作を同定するIt be NP V-ing構文

まず、知覚された事態を同定するIt be NP V-ing構文について考察する。前節の(1)に加えて類例をあげる。たとえば、(3a)の “It’s just an owl calling to its mate” は、先行文中で言及されている「音」をitで指示して、聴覚器官を通して知覚された事態、つまり動作主と動作を同定している。(3b)、(3c)、(3d)の下線部の構文はそれぞれ触覚器官、視覚器官、嗅覚器官といった知覚器官を通して発話場面で知覚された事態を同定している。

(3) a. Once again a sound similar to an alley cat in heat rang throughout the campsite. ‘You mean that? It’s just an owl calling to its mate,’ I said. (E. Paletta, *Never Say Uncle*)
(ふたたび、盛りのついた野良猫のような音がキャンプ場中に鳴り響いた。「あれのこと？あれはフクロウが仲間を呼んでいるだけなんだよ。」と私は言った。)

b. I feel my hands shake, but then I realize it’s just the car starting to stall. (P. Jones, *Stolen Car*)
(私は両手が震えるのを感じたが、すぐに、車がエンストし始めただけなのだとわかった。)

c. A sudden movement startles me. But it’s just Fang returning. (J. Standing, *Raven*)
(突然何かが動いて私は驚いた。しかし、それはファンが戻ってきただけだったのだ。)

d. ‘What’s that smell?’ Pete sniffed briskly. ‘Can you smell it?’ Beth sat up and sniffed. ‘I think it’s something burning.’ (F. Clementis, Would I lie To You?)
(「この匂いは何だ？」ピートはクンクンと匂いを嗅いだ。「匂いがする？」ベスは体を起こして匂いを嗅いだ。「何かが燃えているんだと思うわ。」)

上記のような用法の構文は、大竹(2002, 2021)で論じたように、itは先行する事柄を指示し、小節(small clause)、あるいは疑似修飾節(pseudo-modifier)とDeclerck(1981)が呼ぶ補部を従える構文である。これらは、知覚された事態の動作主と動作を同定する機能を有するIt be NP V-ing構文である。次節以降、従来の研究では詳しく

分析されてはこなかったIt be NP V-ing構文を順に分析する。

３．心中の状態や進行している心的過程を同定するIt be NP V-ing構文

It＋be動詞がその補部に名詞句＋-ing句の連鎖を従えていても、同定するのは知覚された事態だけではない。たとえば、話題中の事柄を説明するために、名詞句の指示対象の心中の状態や進行している心的過程を同定する場合がある。(4a)では、話し手がある事柄を理解できていない現況を説明するために、“Maybe it's me being stupid again”（たぶん、また私の頭の回転が悪いのかもしれない）と述べ、物事を理解できていない心中の状態をIt be NP V-ing構文で表現している。また、(4b)では、手紙を書く気持ちにもなれないほど入院生活に辟易している話し手が、「家に帰りたい」、「体重を増やしたくない」という現在の心中や「体重が増えた気がしている」という進行中の心的過程を３つのIt be NP V-ing構文で披瀝している。

(4) a. “I don't understand that at all.” I gave my head a thoughtful shake. “Maybe it's me being stupid again, but why would people blame Hank? That is so weird to me.”
(P. Reid, *Folk Around and Find Out*)
（「私にはそれが全く理解できないんです。」私は考え込むように頭を振った。「たぶん、また私の頭の回転が悪いのかもしれないけど、どうしてみんなはハンクを責めるんですか？私にはそれがとても奇妙なんです。」）

b. I haven't written for a long time because it's just the same thing over and over again. It's me wanting to go home. It's me not wanting to gain weight. It's me feeling fat. I'm really upset. (S. Christie, *Red Tears and Rib Bones*)
（同じことの繰り返しばかりなので、私は長いこと手紙を書いていません。実は私は家に帰りたいのです。体重を増やしたくないのです。太った気がしているのです。本当に腹立たしいのです。）

また、(5a)では、“What all did you buy?”（何を買ったの？）と相手に質問する話し手の心中が“it's just me being nosy”（いろいろと知りたいだけなんだよ）という状態にあることが伝えられている。(5b)では、“Mel wants me to go over to her place”（メルが私にお家に来てほしいんだって）と言う子供に対して、母親がIt be NP V-ing構文を発話して“not her coming to our place”（彼女が家に来ることがない）という場合には、“you wanting to go there”（あなたが彼女の家に行きたい）という気持ちになるという子供の内心を同定している。

(5) a. “What all did you buy?” “Is that a boyfriend question?” I bit back my smile. “No, it's just me being nosy.” (T. Falkner, *What She Forgot*)
（「何を買ったの？」「それはボーイフレンドがする質問なの？」私は笑いをかみ殺して答えた。「いや、いろいろと知りたいだけなんだよ。」）

b. Homework is done. Mother is ironing. ‘Mel wants me to go over to her place. Can I?’ I ask. ‘You and that girl are always in each other's pocket,’ Mother says with

resentment. ‘If it’s not her coming to our place it’s you wanting to go there. […]’

（T. McNaughton, *In Deadly Earnest*）

（宿題は済んだ。お母さんはアイロンをかけている。「メルが私にお家に来てほしいんだって。行ってもいい？」と私は尋ねる。「あなたとあの子はいつもべったりね。」と母は怒って言う。「彼女が家に来ることがないときには、あなたが彼女の家に行きたいのね。[…]」）

名詞句の指示対象の心中の状態や進行している心的過程を同定するIt be NP V-ing構文は、その先行文脈中の進行中の事柄を契機としてしばしば発話される。(6a)では、“It was me being stupid and careless”（私がぼんやりしていて不注意だった）という話し手の精神状態は、先行文脈中の “I was daydreaming”（空想にふけっていた）という進行中の心的過程と呼応して発話されている。(6b)では、“It was me being out of character.”（私が柄にもないことしようとしていたのでした）という話し手が心中で企てていたことは、先行文脈中の“I was trying to get a run there”（私はそこで走ろうとしていました）という心中で進行していた計画と呼応して伝達されている。

(6) a. I was daydreaming and made a mistake, a bad mistake—but I didn’t do it to hurt you. It was me being stupid and careless.

（R. B. Mitchell, *One Man’s Search for Hope and Home*）

（私は空想にふけっていて、過ち、ひどい過ちを犯しました。でも、あなたを傷つけるために過ちを犯したのではありません。私がぼんやりしていて不注意だったんです。）

b. “I was trying to get a run there. That was my fault. It was me being out of character. That hurt us.” （*Los Angeles Times*, June 4, 2022）

（「私はそこで走ろうとしていました。それは私の判断の誤りでした。私が柄にもないことをしようとしていたのでした。それは私たちを傷つけてしまいました。」）

もちろん、このようなIt be NP V-ing構文の発話の契機となる内容は、現に進行中の事柄であるとは限らない。(7)では、“I started to feel like everyone was looking at me”（みんなが私を見ているような気がしてきました）という感情が話し手の心中で生じ始めてきた事情を説明するために、“Maybe it was just me being self-conscious”（それは私が自意識過剰なだけだったのかもしれません）が発話され、話し手の心的状態が同定されている。

(7) Once the host had asked Raven questions about me, I started to feel like everyone was looking at me. Maybe it was just me being self-conscious. （Winkk, *Tour Secrets 2*）

（司会者がレイヴンに私のことを質問すると、みんなが私を見ているような気がしてきました。たぶん、それは私が自意識過剰なだけだったのかもしれません。）

本節では名詞句の指示対象の心中の状態や進行している心的過程を同定するIt be NP V-ing構文の特性について論じた。

４．話題中の動作・行為の動作主・行為者を同定するIt be NP V-ing構文

It be NP V-ing構文が、話題中の動作の動作主や行為の行為者を同定する機能を果たすことがある。(8)では、無神経な言動を相手にとがめられた話し手が代名詞meとyouに対照強勢を置いて “It's not ME being insensitive, it's YOU being stupid.”（僕が無神経なんじゃない。君が理解力が鈍いんだ）と発話し、V-ingの行為者を同定している。

(8) ‘How can you be so insensitive, Paul?’ ‘It's not ME being insensitive, it's YOU being stupid. Women have children. Full stop. Get used to it, girl.’

（S. Jeffries, *Born to be Trouble*）

（「どうしてそんなに無神経なの、ポール？」「僕が無神経なんじゃない。君が理解力が鈍いんだ。女性には子供がいるものなんだ。話はおしまいだ。この考えに慣れるんだな。」）

名詞句NPに対照強勢が与えられるIt be NP V-ing構文の特徴は、V-ing句が担う情報が話題中の情報から推論可能な点にある。(8)の “It's not ME being insensitive” のV-ing句“being insensitive”（無神経である）は、先行文の“How can you be so insensitive, Paul?” の補部の再述であるし、“it's YOU being stupid” のV-ing句 “being stupid”（理解力が鈍い）も先行する “be so insensitive” と同様に、感情の鈍感な状態を表す同義的表現である。つまり、名詞句NPに対照強勢が与えられるIt be NP V-ing構文のV-ing句は、全くの新情報を伝達しているのではなく、話題中の情報を再度提示していたり、話題中の情報から推論可能な同義的情報を伝えている。

次の例も観察しよう。(9a)の “it's not me being hostile, it's you” ではmeとyouが対照されており、V-ing句 “being hostile”（敵意をもっている）は相手の発話の“You're so bloody hostile”の繰り返しである。さらに、後続する “it's you” はV-ing句が発話されてはいないが、これは文脈から聞き手に容易に推論できるからであると考えられる。(9b)の “it was not you being referred to. It was me.” というIt be NP V-ing構文においても、V-ing句“being referred to”（言及された）は先行文中の“blurted out”（うっかり口に出した）の換言表現である。

(9) a. ‘You've shut me out,’ he said. ‘You're so bloody hostile ...’
‘Matt it's not me being hostile, it's you. I just want —’ （P. Vincenzi, *The Decision*）
（「君は僕を閉め出した」と彼は言った。「君はひどく敵意をもっている…」「マット、私が敵意をもっているんじゃなく、あなたがもっているのよ。ただ私がしたいのは…」）

b. “[…] When you heard the name Kollman blurted out, by Frank, it was not you being

referred to. It was me." (F. J. Ruggio, *Rainbow Ranch*)
(「[…]コールマンがうっかり口に出した名前をあなたがフランクのそばで聞いたとき、あなたの名前が出されたのではありませんでした。私の名前が出されたのです。」)

なお、名詞句NPに対照強勢が与えられるIt be NP V-ing構文が並列するとき、(9b)のように後続するV-ing句が発話されない場合のみならず、先行するV-ing句が発話されない⑽のような事例も見受けられる。

⑽ "Oh, Dad," she hugged him hard. "I don't want to make you cry." He shook his head. "It's not you. It's me being an old fool. […]" (M. Rubenstein, Weddings by the Glass)
(「ああ、パパ」彼女はお父さんを強く抱きしめた。「パパを泣かせたくないの。」すると彼は首を横に振った。「おまえじゃないよ。パパが嫌なやつなんだよ。[…]」)

⑽の "It's not you. It's me being an old fool." では、youとmeが対照されているが、"It's not you." の直後にV-ing句が現れてはいない。これは、先行文中の "make you cry"(パパを泣かせる)という情報から、"It's not you" に "making me cry" といったV-ing句が後続することを聞き手が容易に推論できるために話し手が発話していないものと考えられる。

5. 話題中の事柄についての予想される解釈を否定したうえで実情を同定するIt be NP V-ing構文

話題中の事柄に関連して、話し手がある命題情報を打ち消してから実情を披瀝するIt be NP V-ing構文がある。次の用例を観察しよう。⑾では、"she would understand me wanting to go away" の "me wanting to go away"(私が海外へ行きたい)という先行情報から、予想される "me leaving her"(私が彼女のもとを去る)という聞き手の解釈を打ち消したうえで、"me wanting to do my job"(私が自分の仕事をしたい)という実情を話し手が披歴している。

⑾ "If I had an opportunity to go overseas, she would understand me wanting to go away as well – it's not me leaving her, it's me wanting to do my job," he says.
(ABC Local News, April 21, 2010)
(「もし、私が海外に行く機会があれば、彼女も私が海外に行きたい事情をわかってくれるでしょう。それは、私が彼女のもとを去るのではなく、私が自分の仕事をしたいのです。」と彼は言う。)

このように、話題中の事柄についての予想される解釈を否定してから実情を同定するのに、否定形のIt be not NP V-ing構文に次いで、肯定形のIt be NP V-ing構文が発話されることがある。(12a)では、「そんなに彼に厳しくしないでよ」と相手に言わ

れた話し手が、実情は自分が厳しいのではなく、相手が優しいのであると断言している。(12b)では、「あなたは若すぎて理解できないのです」と言われた話し手が、自分が若すぎて理解できないのではなく、実際には相手が年を取りすぎていて理解できないのであると言い返している。

⑿ a. ‘Ah no, he’s taken a proper beating. Don’t be so hard on him.’ ‘It’s not me being hard! It’s you being soft. You’ve always been too soft. That’s the problem.’

(P. Feeny, *The Beach at Doonshean*)

(「いいえ、彼はちゃんと殴られたよ。そんなに彼に厳しくしないでよ。」「私が厳しいんじゃないわ！あなたが優しいのよ。あなたはいつも優しすぎるの。それが問題なの。」)

b. ‘Perhaps you’re too young to understand.’ ‘It’s not me being too young to understand. It’s you being too old to understand. [...]’ (D. Walker, *The Lord’s Pink Ocean*)

(「あなたは若すぎて理解できないのです。」「それは私が若すぎて理解できないのではなく、あなたが年を取りすぎて理解できないのです。[…]」)

⒀では、牧羊犬とその飼い主が互いの考えをよりしっかりと感知できるようになるためには、“It is not you controlling”（あなたが自分の犬に言うことをきかせる）や“it is not him taking over”（あなたの犬があなたに影響をもつ）といった容易に想定されうるありがちな一方的な態度で互いに接するのではなく、両者がチームとして協働することが大切であると主張されている。

⒀ But if you get your respect, you have a better feel between you and your dog. It is not you controlling, it is not him taking over. It is the two of you working as a team.

(S. Molloy, H. L. Nadelman, *Top Trainers Talk about Starting a Sheepdog*)

（しかし、あなたが尊敬を得るならば、あなたとあなたの犬の間で互いの考えをよりしっかりと感知できるようになるのです。あなたが自分の犬に言うことをきかせるのでもなく、あなたの犬があなたに影響をもつのでもありません。あなたたち両者がチームとして働くのです。）

本節では、話題中の事柄の実情を同定するのに、否定形のIt be not NP V-ing構文を発話して関連して予想される命題を否定し、次いで肯定形のIt be NP V-ing構文が発話される用法を確認した。

６．名詞句NPの「属性」を伝えて話題中の事態を同定するIt be NP V-ing構文

名詞句NPの指示対象がある性質や特徴、つまり「属性」を有することを伝えて話題中の事態を同定するIt be NP V-ing構文がある。次の例では、“the full spectrum of me”（自分の全てを映すもの）を同定するために、話し手の性格や気質といった「属性」がIt be NP V-ing構文で列挙されて伝えられている。

⑭ “This is real, and this is the full spectrum of me,” she says. “It’s me being silly, and stupid, and funny, and bright, and smart, and everything that is embodied in my personality.” (*The Daily Beast,* Jan. 21, 2016)
(「この作品は現実を描いていて、私の全ての面を映しています。」と彼女は言う。「私がばかなところ、間抜けなところ、面白いところ、明るいところ、賢いところ、私の個性に具現化されている全てなのです。」)

ところで、Swan(2016[4])によれば、話題中の人物がすでに明らかな場合には、-ing形の前に所有格表現や代名詞は用いられない(Note that possessives and pronouns are not used before -ing forms if it is already clear who is being talked about.)。

⑮ *Thank you for* ***waiting***. (not ~~*Thank you for your waiting*~~.) Swan(2016[4])

また、itは話題中の事柄を指示することから、“{part / some / much / a lot} of it”のように部分を表す表現で限定を受けることもある。次のようなIt be NP V-ing構文がその例である。⑯では、ソフトボール選手の話し手がヒットを打つとチームが驚くという事態を同定するのに、自分が低身長であるという特徴とともに、“Part of it is being a pitcher”(ピッチャーであること)という自分の属性を伝えている。

⑯ “I think I surprise teams when I hit,” Ziel said. “Part of it is being a pitcher and part of it is probably my height. […]” (MLive.com, May 5, 2022)
(「私がヒットを打つとチームが驚くと思います。」とジールは言った。「ひとつには、私がピッチャーであるのと、ひとつには、おそらく私の身長なのです。[…]」)

次の⑰においても、「カモは私が今までに育てたことがある他のどんな鳥とも違う」という話し手の認識の事情として、“some of it is being a water bird”(ひとつには、カモが水鳥であること)というカモの属性、つまり水鳥であるということが説明されている。なお、後続する “some of it is just that they are strange”(ひとつには、単にカモが普通でないだけなのだ)というthat補文を従えるIt is that節構文は、カモの属性を伝えているのではなく、話し手の解釈を伝えている(It is that節構文の特性の詳細についてはDeclerck (1992), Koops (2007), Otake (2002), 大竹(2021)を参照のこと)。

⑰ The ducks are unlike any other bird I’ve ever raised. I think some of it is being a water bird, and some of it is just that they are strange. (*Bee Culture,* May 21, 2018)
(カモは私が今までに育てたことがある他のどんな鳥とも違うのです。ひとつには、カモが水鳥であることと、ひとつには、単にカモが普通でないだけなのだと思います。)

次の例では、アメリカ大統領に就任したトランプ氏が自分より役職が下のすべての人を自分のものだと思い込んでいることについて、トランプ氏が政界では新参者であるという属性をIt be NP V-ing構文で伝えて説明している。

⑱ “He’s a businessman, so he assumes everybody subordinate to him is his.”
“Some of it is being a novice, but I think some of it is that he just doesn’t think through what it is to be an elected president rather than the head of a company,” he added.
（*Business Insider*, October 19, 2017）
（「彼は実業家なので、自分より役職が下のすべての人を自分のものだと思い込んでいるのです。」「ひとつには、政治の世界では新参者なのです。しかし、ひとつには、彼は自分が会社の長ではなく、選挙で選ばれた大統領であることが何であるかを考えていないだけなのだと思います。」と彼は付け加えた。）

７．まとめ

本研究ではIt＋be動詞がその補部に名詞句＋-ing句の連鎖を従える構文をIt be NP V-ing構文と呼び、実際の言語資料を観察しながらその意味と機能を分析した。従来の研究では、知覚された事態の動作主と動作を同定するIt be NP V-ing構文が研究対象とされてきたが、考察の結果、さまざまな意味と機能を有するIt be NP V-ing構文が存在することが明らかになった。具体的には、心中の状態や進行している心的作用を同定するIt be NP V-ing構文、話題中の動作・行為の動作主・行為者を同定するIt be NP V-ing構文、話題中の事柄についての予想される解釈を否定したうえで実情を同定するIt be NP V-ing構文、名詞句NPの「属性」を伝えて話題中の事態を同定するIt be NP V-ing構文である。

なおも残された課題はある。たとえば、⑲では“not just A but（also）B”（AだけでなくBも）の構文のA位置ではIt be NP V-ing構文が発話されているが、B位置では発話されていない。このような構文の選択の背後にはどのようなメカニズムがあるのであろう。

⑲ Alex said, “It works! I was able to telepathically call for you. So it is not just me being able to hear your thoughts, but I can actually communicate to you with mine! I am going to dive right now and test this.” （P. Ford, *Changes Trilogy*）
（アレックスは言った。「うまくいったぞ！以心伝心で君を呼ぶことができた。つまり、僕が君の考えを聞けるだけでなく、僕のを使えばなんと君と通信もできるんだ。今すぐ潜ってこれをテストしてみるよ。」）

こうした現象について稿を改めて論ずることにする。

また、本研究で取り上げたIt be NP V-ing構文は例文の対訳から明らかなように、日本語の「のだ」構文や「ことだ」構文と一定の対応関係がある。「のだ」構文に対応する英語構文の諸特性を論じたOtake（2002）や大竹（2021）において取り上げられたIt be NP V-ing構文は、知覚された事態の動作主と動作を同定する用法が中心で

あった、今後は、本研究で明らかになった多様な用法のIt be NP V-ing構文と日本語の「のだ」構文や「ことだ」構文を比較対照し、日英語の普遍性と個別性の究明も進めてゆきたい。

＊本研究は2022-2025年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号22K00616「実情や解釈を披瀝する日英語の構文の諸相に関する記述的・理論的研究」（研究代表者：大竹芳夫）の研究成果の一部である。

参考文献

Declerck, Renaat（1981）Pseudo-Modifiers. *Lingua* 54, 135-163.

Declerck, Renaat（1992）The Inferential *It is that*-construction and Its Congeners. *Lingua* 87, 303-330.

Koops, Christian（2007）Constraints on Inferential Constructions. In Günter Radden, Klaus-Michael Köpcke, Thomas Berg and Peter Siemund（eds.）, *Aspects of Meaning Construction*. 207-224. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Otake, Yoshio（大竹芳夫）（2002）Semantics and Functions of the *It is that*-Construction and the Japanese *No da*-Construction. In Ionin, Tania, Heejeong Ko and Andrew Nevins（eds.）, *MIT Working Papers in Linguistics* Vol. 43, 143-157. Cambridge, Massachusetts: MIT, Department of Linguistics, and Philosophy.

大竹芳夫（2021）『「（の）だ」に対応する英語の構文』（2009, 東京：くろしお出版）. Kindle版（電子書籍）, Amazon.

Swan, Michael（2016）*Practical English Usage*. Fourth Edition. Oxford: Oxford University Press.